

明代初期の八股文について (6)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (6)

滝野 邦雄
Takino, Kunio

(六) 正統年間

王恕

王恕（字は宗貫，号は介菴，又の号は石渠，諡は端毅。陝西三原の人。永樂十四年〔一四一六〕～正徳三年〔一五〇八〕。正統十三年戊辰科〔一四四八〕三甲三十名の進士）は，進士及第の後，庶吉士より大理左評事に任官し，揚州知府をへて江西布政使となる。成化帝（憲宗）が即位すると河南布政使になり，左副都御使・南京刑部右侍郎・南京戸部右侍郎・兵部尚書・南京兵部尚書などを歴任する。しばしば直言したため，成化帝（憲宗）やその側近に疎まれ辞任する。弘治帝（孝宗）が即位すると，吏部尚書に起用される。推薦した人物は名臣となるものが多かったという。

愈長城は，次のように評価する。

謝文和公 國家の正人を言う有りて，三原（王恕） 第一とす。論者 之を顔 [子]・孟 [子]・二程 [子]・伊尹・[仲] 山甫に比するは，譽 亦た太はだ過ぎたり。要するに其の美は没す可からざるなり。三原（王恕）の政績 多く紀^{しる}す可き有るも，吏部爲りし時より盛んなるは莫し。夫れ「百官を統べ，四海を均しくする」（『書經』周官）は，吏部の責なり。其の權を僚屬に散じ，其の成（論斷）を吏胥に聴き，舊例を以て奇才を格し，虚聲を以て眞士を失い，黜陟進退 己に於いて與^{あずか}る無きは，何ぞ官を以て爲さん。三原（王恕） 蒐羅（収集）・簡擇（選択）は虚懷なること壑の若く，汲引（推薦）・執奏（上奏）は抗節（節操を固持する）なること山の若し。

「任に勝り愉快なる」①者と謂わざる可けんや。吾（兪長城）嘗て謂う、宰相の功は君を正すより大なるは莫し。[それについては]一人を得、岳蒙泉（岳正）と曰う。吏部の功士を得るより大なるは莫し。[それについては]一人を得、王石渠（王恕）と曰う。二公 同榜の進士なり。文も亦た並駕齊驅なり。科目の盛んなること此の如し。制義の一道 百王と雖も廢さざるは可なり（兪長城『題王宗貫稿』『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・二十葉～二十一葉・「王宗貫稿」条）。

①『史記』酷吏傳に「太史公曰、……當是之時（秦代）、吏治若救火揚佛、非武健嚴酷、惡能勝其任而愉快乎」。

拙稿では、『中庸』の「郊社之禮」を題目とする、王恕の八股文を検討してみたい。題目は、太字で示した箇所である。

郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎，

〔朱注〕郊，祭天。社，祭地。不言后土者省文也。禘，天子宗廟之大祭。追祭太祖之所自出於太廟而以太祖配之也。嘗，秋祭也。四時皆祭。舉其一耳。禮必有義，對舉之互文也。示，與視同。視諸掌，言易見也。此與論語文，意大同小異，記有詳略耳（『中庸』第十九章・第六節）。

中庸推聖人之禮為難明，所以深著其達孝也，

夫制禮之意亦微矣，非天下之至明，其孰能與此而足于治哉，

且為國莫大于禮，制禮莫先于祭，

①達孝：『中庸』第十九章・第一節に「子曰、武王・周公、其達孝矣乎」。

②非天下之至明：『論語』顏淵・「顏淵問仁」章の朱注に「愚按、此章問答、乃傳授心法、切要之言。非至明、不能察其幾」。また、『孔子家語』王言に「所謂天下之至明者、能舉天下之至賢也」。

③為國莫大于禮：『論語』先進に「[孔子] 曰、為國以禮、其言不讓」。

觀乎周禮寓意之深，尤可以見武周繼述之孝矣，

①尤：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・襯語辭第四・二十六葉）に「更也、甚也」。

②繼述之孝：『中庸』第十九章・第二節に「夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也」。

① 彼其所制郊社之禮，于義何取乎，盖以萬物本乎天地，義不可忘其所自生也，
故禮有郊社，以示報焉，
其所制宗廟之禮，于義又何取乎，盖以吾身本于先祖，義不可忘其所自出也，
故禮有禘嘗，以示報焉，

① 彼：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・轉語辭第三・十八葉）に「別説に借りて以て此の説を伸ばすの辭」。

② 萬物本乎天地：『禮記』郊特性に「萬物本乎天，人本乎祖，此所以配上帝也，郊之祭也，大報本反始也」。また、『孔子家語』郊問に「定公問于孔子曰，……孔子對曰，萬物本乎天，人本乎祖，此所以配上帝也，郊之祭也，大報本反始也……」。

③ 不可忘其所自生也：『禮記』禮器に「禮也者，反其所自生」。鄭注に「自，由也，制禮者，本己所由得民心也」。

④ 吾身本于先祖：②参照。

⑤ 不可忘其所自出也：③参照。また、『禮記』喪服小記と大傳とに「王者禘其祖之所自出，以其祖配之」。

① 若此者，非仁人孝子出于其心之不容已，而真見夫理之不容廢者，莫能制此禮于當時，

非深識仁人孝子所不容已之心，與不容廢之禮者，亦莫能明此禮于今日，

① 若此：殖學齋編訂『舉業辨字』（不分卷・接語辭第二・八葉）に「直ちに上文を指し，將に問難を為さんとすの辭」。

有能明乎郊社之禮，而于義無不精，

明乎禘嘗之義，而于禮無不達，^①

① 于禮無不達：『禮記』禮運に「故先王患禮之不達於下也」。

則一理融而萬事畢，窮神知化之餘，必不因時而有顯晦矣，舉而措之于國，亦奚為而有難處之事耶，^③

一誠立而萬化彰，默契感孚之下，必不易地而有通塞矣，運而形之于治，亦奚為而有難化之人哉，^⑤

① 一理融而萬事畢：『莊子』外篇・天地に「記曰，通于一而萬事畢，無心得而鬼神服」。

② 窮神知化：『周易』繫辭傳下に「窮神知化，德之盛也」。

③ 難處之事：『孟子』盡心上「桃應問曰」章の朱注に「學者察此而有得焉，則不待較計論量，而天下無難處之事矣」。

④ 默契：『中庸章句』第三十二章第一節の朱注に「天下之道，千變萬化，皆由此出。所謂立之也。其於天地之化育，則亦其極誠無妄者，有默契焉。非但見聞之知而已」。

⑤ 難化：『莊子』雜篇・漁父に「孔子伏軾而歎曰，甚矣由之難化也」。

謂之曰示諸掌，信乎既明且易，而國之難治者，凡以斯禮之未明耳，
觀此則知武周之禮，本于至情，而繼述之^③心，可以想見，謂之達孝^④，不益然哉
（『制義文統類編』（第五體（第五冊）・「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，
所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎 王恕」条）。

①明且易：『論語』八佾「或問禘之說」条の朱注に「指其掌，弟子記夫子言此而自指其掌。言其明且易也」。

②斯禮：『中庸章句』第十八章第三節に「武王末受命，周公成文武之德，追王大王・王季，上祀先公，以天子之禮，斯禮也，達乎諸侯大夫及士庶人」。

③繼述之心：『中庸』第十九章・第二節に「夫孝者，善繼人之志，善述人之事者也」。

④達孝：『中庸』第十九章・第一節に「子曰，武王・周公，其達孝矣乎」。

もともと、題目となっている第六節は、前節の「踐其位，行其禮，奏其樂，敬其所尊，愛其所親，事死如事生，事亡如事存，孝之至也」（第五節）の朱注に「此れ上文の〔第三節・第四節の〕兩節を結ぶ。皆な〔第一節でいう〕「志を繼ぎ」・「事を述ぶ」るの意なり」とあることから、第五節までで「達孝」の説明は終り、この題目の第六節は、独立した説明を行なっていると理解するものであった。ところが、明代の後期から清代になると、十九章全体のまとめの部分であるという解釈もあらわれるようになったようである。

明末の曹勳（字は允大。浙江嘉善の人。崇禎元年戊辰科〔一六二八〕二甲二名の進士・會元）の『四書主意玄碧』（崇禎元年〔一六二八〕序）は、次のように言う。

〔七纂〕上節の「孝之至也」もて已に「達孝」の意を束言す。然れども上〔節〕の言う所、俱に只だ是れ宗廟を説くのみ。諸侯大夫士庶人に達するも、武・周の斯禮^①を以て國を治むに非ざるか。即ち本章の云う所は、「昭穆を序し」（第十九章第四節）、「貴賤を辨じ」（第十九章第四節）、「賢を辨じ」（第十九章第四節）、幼を幼とし老を老とす^②。孰れが治國の道に非ざらんや。社に明らかなりて、嘗に明らかなるも、其の禮・其の義 尚お狭し。未だ必ずしも能く曠く^{ひろ}一國の外を觀ず。惟だ郊に明らかにして、禘に明かなれば、則ち是れ天子・宰相 國を治むる所の大經・大典 具に目前に在

り、具に胸中に在り。何ぞ國を治むるに難からん（『四書主意玄碧』十卷・三十六葉・「達孝章」条）。

①『中庸』第十八章・第三節に「武王未受命，周公成文・武之德，追王大王・王季，上祀先公，以天子之禮，斯禮也，達乎諸公大夫及士庶人……」。

②『孟子』梁惠王上に「老吾老，以及人之老，幼吾幼，以及人之幼，天下可運於掌」。

第五節の末に「孝之至也」とあり，そこで「達孝」の意味は，完結している。そこで，この題目となった第六節は，新たに治國の法を述べていると解釈する。

陳組綬（江蘇・武進の人。崇禎七年甲戌科〔一六三四〕二甲三名の進士）の『四書副墨』（明末伊盧刻本）は，

〔六節〕此れ正に「達」字を提明にし，以て一篇の大旨を歸束す。「上帝に事う」・「其の先を祀る」は，是れ其の意義を推さざるも，乃ち是れ特地に指點し出し來り，以て天下・治國と相い對し，明禋①・經濟（經世済民）を把つて滾作一團（ひとつに混ぜ合わせる）し，正に聖孝の天下に達する處を見わす（『四書副墨』中庸・五十九葉～六十葉・「第十九章」条）。

①『書經』洛誥に「曰明禋，拜手稽首休享」とあり，蔡沈は『書經集傳』で「明，潔。禋，敬也。以事神之禮事公也」と注する。

と言い，この十九章のまとめの部分となっていると考える。

清の『殖學齋編訂四書大全』（雍正十一年〔一七三三〕刊）は，次のように理解する。

〔節解〕此の節 是れ上で已に「達孝」を結過すれば，又た別に一節を出だす。蓋し祭祀の禮 郊・社・禘・嘗より出でず。而して上文 只だ宗廟の禮を説くのみ。故に〔明・蔡清の『四書蒙引』（卷三・「郊社之禮禘嘗之義」条）でいう〕「此の節 悉く其の禮制を擧げて言い，深く其の意義の深遠なるを賛するなり」と。『〔四書〕蒙引』の説は是なり（雍正十一年〔一七三三〕刊『殖學齋編訂四書大全』中庸卷之一・八十葉）。

第一節でいう「達孝」の説明が前の第五節で終わっているの、ここで別の説明を行なう。祭祀の禮は、郊・社・禘・嘗であるが、前節までは、ただ宗廟の禮のみを説明している。そのため、この題目となっている第六節では、すべての祭祀の禮を掲げて、その意味深長なことを述べているというのである。

清の『四書題鏡』(乾隆三十五年〔一七七〇〕刊)は、八股文で重視される文脈を視野に入れて次のように述べる。

上文 已に結過す。理を論ずれば、必ずしも復た「達孝」・「繼」・「述」を糾(糾の別字)纏(からみつく)せず。胡氏(胡炳文)「別に是れ一意有り」の説有る所以なり。⁽¹⁾但だ[そのように理解して]泛く講ずれば、章脉と相^{つら}い聯なり難し。周初の先王の「社」有りて「郊」無く、「嘗」有りて「禘」無く、天子と爲るに及びて乃ち「郊」・「社」並びに擧げ、「嘗」・「禘」並びに行なう⁽²⁾を得るを知らず。正に是れ「善繼」・「善述」内の事なり。益ます其の「達孝」を爲すを見ず。時文 多く此の意に本づき聯合す。則ち此の節は仍お是れ孝を論ず。禮を泛論するに非ざるなり。須く上の「孝」

- (1)『四書大全』に元・胡炳文(字は仲虎、号は雲峰。安徽婺源の人)の『四書通』(中庸通・卷二)の説を引いて次のようにある。

〔雲峰胡氏曰〕上文の「孝之至也」もて已に「達孝」の二字を結了す。此れ又た別に是れ一意あり。蓋し上章と此の章の上文とは専ら宗廟の禮を以て言う。此れは則ち兼ねるに郊禘の禮を以て言う。周公の制して禮法を爲し、未だ嘗て上下の情に通ぜざることあらず。亦た未だ嘗て上下の分に嚴ならざることあらず。祭祀の禮 上下に通じ上帝に事うるを行なうことを得。惟だ天子のみ之を行なうことを得。故に特に先後して之を言う。此れ「上帝に事うる所以なり」・此れ「其の先を祀る所以なり」と曰うは、名分 截然として犯す可からざるなり。「郊社の禮に明らか」なれば、胡ん爲れぞ郊を先にし社を後にせんや。郊は天を祭り、惟だ天子のみ之を行なうを得。社は則ち侯國より以て庶人に至るまで、各々社有りて、上下 通行す可きなり。「禘嘗の義に明らか」なれば、胡ん爲れぞ禘を先にし嘗を後にせんや。禘は大祭にして、惟だ天子のみ之を行なうを得。嘗は宗廟の秋祭なりて、上下 通行す可きなり。前章(第十八章)の末に「三年之喪」を言い、庶人の以て天子に通づるを得るは、必ず父有ればなり。此の章の末に「禘嘗之祭」を言い、諸侯の以て天子に通づるを得ざるは、必ず君有ればなり。但だ周公の制禮の此の如きを言うも、魯の郊禘の禮に非ず足らず、其の意 自ずから言わざるの表に見わる。此れ聖人の言爲る所以なり(『四書大全』中庸章句集註大全・「郊社之禮、所以事上帝也、宗廟之禮、所以祀乎其先也、明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎」条)。

字を承けて「禮」字を出せば、方に把鼻（根拠）有るべし（乾隆三十五年〔一七七〇〕刊『四書題鏡』中庸・四十一葉・「郊社節」条）。

前の第五節で意味が完結していて、理論上は前節に提示される「達孝」・「繼」・「述」とは関係しない。ただしそのように理解すると、この十九章全体の流れと連ならなくなってしまう。「社」・「郊」・「嘗」・「禘」をまとめ述べていることは、まさしく「善繼」・「善述」の内容である。多くの八股文は、こうした連なっているという観点から作成されている。したがって、この第六節は、上文からの連なる「孝」について論じているのであり、禮を概論しているのではないというのである。

このように、明代の後期から清代になると、この題目は、前節から独立したものとする解釈以外に、前節をうけたまとめの部分であるとする理解もあったようである。

明の張居正の『四書直解』は、この節を次のように直解している。

郊は是れ天を祭り、社は是れ地を祭る。上帝は即ち是れ天なり。上帝を言えば則ち后土は其の中に在り。禘は是れ五年の大祭。嘗は是れ秋祭。秋祭を言えば則ち其餘は其の中に在り。「示」字と「視」字は同じ。掌は是れ手掌なり。「示諸掌」は看得て明白なるを説う。孔子 又た〔以下のように〕説う。武王・周公の制する所の祭祀の禮は、但だ上文の言う所の如きのみならず、總じて之を言えば、郊社の禮有り、宗廟の禮有り。郊社の禮は、或いは圓丘に行ない、或いは方澤に行なう。蓋し上帝と后土とを事奉して、其の「覆載生成」①の徳に答える所以なり。宗廟の禮は、或いは五年に一たび擧ぐ、或いは一年に四たび祭る。蓋し其の祖先を祭祀し、吾が「本に報じ

✓(2) 注(1)に引用した『四書大全』に、

〔雲峰胡氏曰〕……郊は天を祭り、惟だ天子のみ之を行なうを得。社は則ち侯國より以て庶人に至るまで、各々社有りて、上下 通行す可きなり……禘は大祭にして、惟だ天子のみ之を行なうを得。嘗は宗廟の秋祭なりて、上下 通行す可きなり……（『四書大全』中庸章句集註大全・「郊社之禮、所以事上帝也、宗廟之禮、所以祀乎其先也、明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎」条）。

とある。

遠きを追う」②の誠を盡す所以なり。この郊・社・禘・嘗は是れ國家の極めて大なるの禮義なり。其の中の義理 微妙にして、測識し難し。若し能く此の禮・義を明らかにし、疑い無ければ、則ち理 明らかならざるは無く、神 格^{いた}らざる無く、天下・國家を治むるの道理 此れに即きて在り③、就ち自家の手掌を看るが如しと一般^{おなじ}く、何等 明白ならんや。蓋し幽明 一理にして④、幽 知り難しと爲す。神人 一道にして、神 格^{いた}り難しと爲す。既にして能く幽に通じ、神に感ずれば、則ち明にして治まる。又た何の難きことか之れ有らんや。夫れ武王・周公の制する禮は、惟だ善く先王を體するのみならず、又た治道に通ず。此れ「倫を盡し、制を盡し」⑤、中庸に合う有る所以の道なり（『重刻張閣老經筵四書直解』中庸・卷二・二十三葉「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎」条）。

①『中庸』第十二章・第二節の朱注に「愚謂人所憾於天地，如覆載生成之偏，及寒暑靈祥之不得其正者」。

②『論語』八佾「或問禘之說」条の朱注に「先王報本追遠之意，莫深於禘」。

③『論語』八佾「或問禘之說」条の朱注に「蓋知禘之說，則理無不明，誠無不格，而治天下不難矣」。

④『論語』先進「季路問事鬼神。子曰，未能事人，焉能事鬼。曰，敢問死。曰，未知生，焉知死」条の朱注に「蓋幽明始終，初無二理，但學之有序，不可躐等。故夫子告之如此」。

⑤『荀子』解蔽に「聖也者，盡倫者也，王也者，盡制者也」。

張居正は、「孔子 又た[以下のように] 説う。武王・周公の制する所の祭祀の禮は、但だ上文の言う所の如きのみならず、總じて之を言えば、郊社の禮有り、宗廟の禮有り」としているところからすると、朱注や『四書大全』によって、独立した意味を持つ節と理解していたように思われる。

また、清の康熙帝御定『日講四書解義』（康熙十六年〔一六七七〕刊）は、次

のように理解する。

……夫れ郊社の帝を享する所以・禘嘗の親を享する所以は、其の禮 至って大なり。其の義 至って精なり。惟だ聖人のみ能く之を制し、亦た惟だ聖人のみ能く之を明らかにす。苟し能く郊社の禮・禘嘗の義に明らかになれば、則ち仁孝の理もて之を萬事・萬物に推し、往くとして當らざる所無く、治國の道、此れに卽して在り。其の諸を手掌に視るが如く、甚だ明らかにして、「見易き」(『中庸』第十九章・第六節・朱注) 者なるか。武・周の禮を制すること惟だ善く先王を體するのみならず、且つ治道に通ずること此の如し。子思 此れを引きて以て武・周の孝を見わし、^{あら}「倫を盡し、制を盡し」(『荀子』解蔽)、皆な中庸の道に合うこと有り。是れ亦た「費」の大なる者なり。帝王 孝を以て天下を治め、「制禮作樂」①・理明治幽の間に於いて、宜しく之が意を加うべし(『日講四書解義』卷之二・中庸上・「踐其位、行其禮、奏其樂、敬其所尊、愛其所親、事死如事生、事亡如事存、孝之至也、郊社之禮、所以事上帝也、宗廟之禮、所以祀乎其先也、明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎」条・三十六葉～三十七葉)。

①『禮記』明堂位に「周公踐天子之位、以治天下。六年、朝諸侯於明堂、制禮作樂、頒度量、而天下大服」。

『日講四書解義』も、武王・周公の「孝」と関連づけて説明していないことから、やはり独立した節と考えていたのではないだろうか。

では、王恕はどのように理解して八股文を書いたのであろうか。趙國麟は、王恕の八股文を次のように理解する。まず、この八股文の前半は武王・周公について述べ、後半はそれ以外の人についての議論である。前半は合で、後半は開となる。⁽³⁾そのため、この八股文は二つの意味からなっている。また、前半は武王・周公の祭祀の禮とその意味を述べ、後半はその意味を明らかにしてそれをたたえ、たたえながら開にしていると考え。また、この題目は、禮の制度の意味から国を治めることに及ぶ。しかし、すべて国を治めることにかかわっているので、この王恕の八股文は、起講で「為國(國を^{おさ}む)」より説き起こし、題目の

要点をおさえている、とするのである。つまり、趙國麟によれば、十九章全体の流れをふまえながらも、独立した節という理解で王恕がこの八股文を書いたと考えていたと言えるのではないだろうか。

[この八股文は] 上は武 [王]・周 [公] を言い、下は他人を論ず。上は合、下は開なり。故に上下二意を為す。○武 [王]・周 [公] の制する所の祭祀の禮を論じ、叙して其の義を申べ、下は即ち其の義なる者を明らかにして之を賛す。故に又た兼ねて賛し兼ねて開にす。○此の題は固より是れ禮制の意に因りて之を治國に推す。然れども武 [王]・周 [公] は即ち治國の人にして、郊社・宗廟は皆な治國の事。[そのため、起講で]「為國」より説き起し、提綱①生目（主要な点を押さえる）、形 達し（形式がととのい）、理 順い（すじが通る）、賓主を倒亂（逆転）するを為さざるなり（『制義文統類編』（第五體（第五冊）・「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，審嘗之義，治國其如示諸掌乎 王恕」条・王二）。

①提綱：『制義綱目』に「綱に綱有り。提綱は則ち綱張るなり。」（『制義綱目』不分卷・文識總論・「一曰提綱挈領（要点をつかみ出す）」条・八十八葉）。

王恕の八股文は、次のように展開する。破題は「中庸 聖人の禮を推して明らかにし難しと為すは、其の達孝に深著なる所以なり」と破き、承題で「夫れ禮を制するの意は亦た微なり、天下の至明に非ざれば、其れ孰れか能く此れと治むるに足らんや」と承け、起講は「且そも國を為むるは禮より大なるは莫し、禮を制するは祭より先なるは莫し」とする。

入題で「周の禮の寓意の深きを観て、尤に以て武・周の繼述の孝を見る可し」

✓（3）趙國麟の『制義綱目』は、「開」を、

此の意を明らかにせんと欲し、先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・題氣總論・「十曰開合」条・二十九葉）。

とし。「合」を、

既に彼の意を明らかにし、忽ち前の意に接し以て之を印（符合さす）するを合（閤）と曰う（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・題氣總論・「十曰開合」条・二十九葉）。

と解釈している。本稿（5）注（2）・51頁参照。

とし、提股で「彼の其の制する所の郊・社の禮、義に于いて何をか取らんや、盖し萬物を以て天地に本づけ、義 其の自り生ずる所を忘る可からざるなり、故に禮 郊・社有り、以て報を示す／其の制する所の宗廟の禮、義に于いて又た何をか取らんや、盖し吾身を以て先祖に本づけ、義 其の自り出ずる所を忘る可からざるなり、故に禮 禘・嘗有り、以て報を示す」とする。

中段で「此の若き者は、仁人・孝子の其の心の已む容からざるに出でて、真に夫の理の廢す容からざるを見る者に非ざれば、能く此の禮を當時に制する莫し／仁人・孝子の已む容からざる所の心と廢す容からざるの禮とを深く識る者に非ざれば、亦た能く此の禮を今日に明らかにする莫し」とする。

後股で「能く郊・社の禮を明らかにし、義に于いて精ならざるは無き／禘・嘗の義を明らかにし、禮に于いて達せざるは無き有り」とする。

收股で「則ち一理 ^{とお}融りて萬事 畢り、窮神知化の餘、必ず時に因らずして顯晦有り、舉げて之を國に措き、亦た奚^{なんす}為れぞ處り難きの事有らんや／一誠 立ちて萬化 彰かなり、默契感孚の下、必ず地を易えずして通塞有り、運びて之を治に形^{あら}わし、亦た奚^{なんす}為れぞ化し難きの人有らんや」とする。

收結は、「之を謂いて諸を掌^みに示ると曰う、信^{まこと}なるか既に明にして且つ易し、而して國の治め難き者は、凡そ斯の禮の未だ明らかならざるを以てなるのみ」とする。

大結は「此れを觀れば則ち武・周の禮を知り、至情に本づき、繼述の心、以て想見す可し、之を達孝と謂う、益ます然らざらんや」とするのである。

趙國麟によると、入題の「周禮寓意之深（周の禮の寓意の深き）」は、題目の内容のすべてを押さえており、「武周繼述之善^{ママ}（孝）（武・周の繼述の孝）」を導きだし、賓と主とをはっきりさせているという。

起講で「國を為^{おさ}むるは禮より大なるは莫し、禮を制するは祭より先なるは莫し（為國莫大于禮、制禮莫先于祭）」と述べて、國→禮→祭と重要なものを説明して、題目の要点をおさえている。そして、入題で「周の禮の寓意の深きを觀て、尤^{さら}に以て武・周の繼述の孝を見る可し（觀乎周禮寓意之深、尤可以見武周繼述

之孝矣)」と述べて、『中庸』十九章全体の意味をとらえ、明示する。そのため、提股の「其の制する所の郊社の禮、義に于いて又た何をか取らんや（其所制郊社之禮、于義何取乎）」と「其の制する所の宗廟の禮、義に于いて何をか取らんや（其所制宗廟之禮、于義又何取乎）」とは、題目の内容をはっきりと示し、粗略にしていないのである。それはまた、題目の意味の流れから下句を重視しているのである。そもそも下部を疎通させることは、とりもなおさず上部を疎通させることになる。

「周禮寓意之深（周の禮の寓意の深き）」一語は全題を渾擒し、「武周繼述之善（孝）（武・周の繼述の孝）」を落出す。賓主 分明なり。○此の文の起處は、[「為國莫大于禮，制禮莫先于祭」] 二語を用いて提綱生目（主要な点を押さえる）す。又た[その後で「觀乎周禮寓意之深，尤可以見武周繼述之孝矣」] 二語を用いて全題を渾擒①し、題主を落出す。故に二目の首の二句（提股の出比の最初の「其所制郊社之禮，于義何取乎」句と對比の最初の「其所制宗廟之禮，于義又何取乎」句）は以て明點（はっきりと指摘する）直出し、輕畧（粗略）を為さざる可し。[それはまた、] 題意を以て

✓(4)『制義綱目』の「三曰賓主齊行」条に「語中に賓主有り」とあり、次のような割注がつけられている。

「唐虞之際，[於斯爲盛]」（『論語』泰伯）二句の如きは、先ず「唐虞」を説き、後に「斯」を説く。此の語中の次第は賓主なり（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・文識總論・「三曰賓主齊行」条・八十九葉）。

同じく「三曰賓主齊行」条に「意中に賓主有り」とあり、次のような割注がつけられている。

語 先ず「唐虞」を説くと雖も、意は却て「斯」「盛」を重言す。此れ意中の賓主なり（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・文識總論・「三曰賓主齊行」条・八十九葉～九十葉）。

また、「三曰截題」条の「擒處須分輕重」の箇所には、次のような割注がある。

輕重を審べるの法は、賓主を分かつに在り。賓 輕くして、主 重し。此れ定理と爲す。而して主の中に又た微かに別有り。語中の主有り、意中の主有り。學を論ずれば則ち學を以て主と爲し、人を論ずれば則ち人を以て主と爲すが如きは、此れ語中の主なり。然らば、「三年學」（『論語』泰伯）を論じて、其の「不易得」を歎ず、「文子三思[而後行，子聞之曰，再斯可矣]」（『論語』公冶長）を論じて、之を裁ちて「再」を以てす、此れ意中の主なり。意の語中に在る者は、其の重固 言を待たず。語の此に在りて、意の彼に在る者の若きは、則ち當に語中の主を以て重しと爲さず、意中の主を以て重しと爲すべし（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・題體總論・「三曰截題」条・八葉）。

下句を超重す。下を疏するは、即ち上を疏する所以なり（『制義文統類編』（第五體（第五冊）・「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎　王恕」条・王二）。

- ①『制義綱目』に「〔渾擒〕題中の大意を將って渾渾として擒起するなり」（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・文局總論・「一曰擒」条・四十二葉）とあり、「擒」は「言うところは領要を得るの謂いなり」（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・文局總論・「一曰擒」条・四十葉）とある。

また、後股で流水法を用いて、題目の「明乎郊社之禮，禘嘗之義」を「有能明乎郊社之禮，而于義無不精／明乎禘嘗之義，而于禮無不達（能く郊・社の禮を明らかにし，義に于いて精ならざるは無し／禘・嘗の義を明らかにし，禮に于いて達せざるは無き有り）」と展開するところは，武王・周公から解き放って一般論とし，この八股文の眼目となっているだけでなく，次の隆慶（一五六七年～一五七二年）・萬曆（一五七三年～一六二〇年）年間の技法の門徑を開いている。さらに，「明乎郊社之禮」・「明乎禘嘗之義」とするのは，朱注の覆われていたところもはっきりさせてもいるという。

流水二比を用い，武〔王〕・周〔公〕より「明乎」を卸（解き放）し到る者は，理　寔に氣　空にし（道理は通しながら『中庸』第十九章全体の流れを薄くして一般論化する），一篇の勝ちを扼え，〔隆〕慶・〔萬〕曆の匠巧の法門を開く。○「禮」・「義」の二字は互文甚だ妙なり①。註の覆い^{おお}を發す（『制義文統類編』（第五體（第五冊）・「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎　王恕」条・王二）。

(5)『斯文規範』に，

言うところは，兩股に屬すと雖も，實は一氣に本づくこと，一水の分かれて兩つと爲るも，實は同一の源なるが如きと相い似たり，故に流水と曰う（『斯文規範』卷之三・十六葉・「一曰流水」条）。

とある。

①題目の朱注に「禮必有義，對舉之互文也」。

さらに、末句で『論語』八佾「或問禘之說」条の朱注を用いて「治國示掌」を疎通させるのは、きわめてみごとな処置であるとも言う。

末二比は「理 照らさざるは無く、誠 格らざるは無し」①の二義を用いて、「治國示掌」を疏するは、了當（処理）するの極なり（『制義文統類編』（第五體（第五冊）・「郊社之禮，所以事上帝也，宗廟之禮，所以祀乎其先也，明乎郊社之禮，禘嘗之義，治國其如示諸掌乎 王恕」条・王二）。

①『論語』八佾「或問禘之說」条の朱注に「蓋知禘之說，則理無不明，誠無不格，而治天下不難矣」。

このように、王恕の八股文は、破題と入題で「孝」についてふれ、第十九章全体の流れをふまえてはいるものの、八股文の要点をまとめる部分の起講で「且^{（6）}そも國を為^{おさ}むるは禮より大なるは莫し，禮を制するは祭より先なるは莫し」と述べていることからすると、『四書大全』所引の胡炳文の理解のように、題目を前節から独立したものと理解して書かれていると考えられる。また、この八股文の眼目とされる後股も、題目を朱注にしたがって修辭的な言い換えを行なっているだけである。すると、この王恕の八股文は、朱注や『四書大全』にしたがいそれを敷衍して書かれたと言えるのではないだろうか。

（つづく）

（6）起講の後の入題で「周の禮の寓意の深きを觀て、尤^{さら}に以て武・周の繼述の孝を見る可し」と述べているのは、入題がいわゆる八股（提股・中股・後股・收股）で展開される本論の直前に置かれ、その導入部にあたるため、題目から截去れた上文を要約する箇所であるからである。拙稿「清代八股文における入題について」（『經濟理論』第316号・2003年刊）参照。